

雜感數則

京都 北垣靜處氏談

△日本畫の將來といふ問題は實に考ふ可きもので現今のやうに、凡ての畫家が概ね皆迷はないのはなく、或は利己の爲めに暗黒相索り、或は虚名を博せんが爲に霧中相談するの有様で、一向に歸する所を知らないのは實に残念なことである。

△曩に京都先輩者の反省を乞はんが爲に、先輩者が餘りに無方針でもつて、泰西の畫を參酌し、ごちらかさいへば夫に心醉するやうな傾向があるのを難じて、現在日本畫の振作啓發を計らなければならぬ時期に方つては、宜しく先輩者が一定の本領を立て、後輩の從つて歩む可き道を示されんことを請ふた。

△然るに夫が端なくも誤解されて、徒らに保守的な泰西畫を嫌ふものとして反駁を受けたが、私は殆んど其意を解するに苦しむものである。私は決して絶對的に泰西畫を排斥するものではない、泰西の畫には泰西の畫として賞すべき價値のあることは勿論認容するものである、然し和洋折衷とか混合とかいふ事には根本的に反對する者である、といふのも畢竟之は二兎を追ふもので、一も得る所がない、徒らに手を空するの悔があらうと思ふからである。

△今日人智が開發して來てゐるから、寫實畫を好む者もあらうし、亦寫意の畫を愛する人もあらう孰れにしても美を表現するに於いては一でなければならぬ。油繪許りが美を表現するもので、その方法が發達しなければならぬ、日本畫は到底進歩するものでないといふ理由はあるまい。

△夫で曩にも言つた如く油繪で採る方法と、日本畫で取る手段とを別にしないで、折衷とか混合とかいふやうにすれば、所謂二兎を追ふ者の罪を免れない。夫よりは一層油繪をよと思ふものは、全く油繪を學んで、日本畫を捨てて了ふがよいと思ふ。日本畫にもあらず、洋畫にもあらずものが何で進歩したものといはれやう。西洋人も感心が出来ねば、日本人も感心することが出来ぬのである。

△夫であるから彼の西洋人が、嚴に本領を確立して、學理と自然とに據り、熱誠に研究しつゝあるやうに、我が日本畫家も進んで着實な研究を積み愈々進んで、彼よりも遙かに高い所に着眼せなければならぬと思ふ。

△之に就て某貴顯が論せられたことがある、一身を以て天下の重きに任じ、時に山紫水明の境に遊んで松風蘿月に塵襟を洗つてゐるゝ某貴顯が、頃日新派と稱する繪畫の流行に付いて論せられたのを聞いたが、頗る參考に資す可き所があるやうである。その談論の要旨といふのは次の如くである。

△維新前余等が國事に奔走してゐた頃、攘夷的開國論といふのがあつた。攘夷の事が當時行はれなことは少しく識力あるものは皆な知つてゐる所であつた。が、頭から開國を唱へてゐるものゝ中には怯懦な膽の無い者もあつた。此中に在つて攘夷的開國論を唱へたのは、一方には随分攘夷も仕兼ねぬ程の氣胆骨力も有り、少しも我國の體面を損せずして開國を遂行しやうとする者で、或藩の如き一度は外國人と砲火相見えたこともあるが、開國の舉に於てもまた人後に落ちなかつた。

△此事を移して、今の繪畫界を觀るのに、我繪畫が猶改革すべき餘地のあるのは言ふ迄も無いが、さりとて新派とか折衷派とか稱する繪畫の多くは徒らに泰西趣味の皮相に心酔して、我日本畫の本領を没却して筆力は纖弱になつて了つた。否多くは塗抹したもので、賦彩は孟浪である。沈着の趣は少しも無い。其題を命じ、圖を構ふるに至つては全然我國の嗜好に同化しない。之を見てゐると輕くて燥かしい風が人を襲ふて見るに堪えないやうになる。之は頭から開國を唱へたものと同じやうに、自己の氣胆骨力がなく、日本畫の本領を顧みないで、漫りに彼に心酔するからである。

△余は此類の畫家にも、所謂攘夷的開國主義であることを望む。かくいへば語弊があるかも知れぬが要は日本畫固有の長所は飽までも研究し保存し、然して後に參酌して可なる所は採り、さうでないのは捨てるといふことにするのである。戦ひの用意があつて和することゝしなければならぬ。彼を致して我の彼に致さねばならぬ。彼を致さねばならぬのである。彼を致して彼に致さねばならぬ。豈に曾に兵法のみならぬである。何事でも皆此心がなければならぬ、さうでなければ日本畫もあはれ一時衰亡に淪むであらう。云々

印象派の繪畫 (其原由と發達)

本篇はインターナショナル、スチューデント上ウインソード、レノハースト氏が論述したるものも摘要記載にして、原文印象派の事に關し、頗る明確詳細を極め、斯道に資する所多大なるを信す、只だ譯文の之を盡さざるを憾む。(I 生述)

茲に論せんとする所は、佛國印象派の法により時に或はその模倣者として論せらるゝ所の英國畫家が、實はその固有のものを生じて、彼のローヤルアカデミーの歴史中最も名譽ある彼のアカデミシヤンを生じたることにありとす。予は此好題目を研究するにつれて、益々千七百九十年より千八百五十年に至る英國の繪畫は、印象派の觀念によりて偉大なる勢力範圍に包みこまれ、事實上コンステイブル、ターナー、ポントンを稱せざる可らざるを感じぬ。

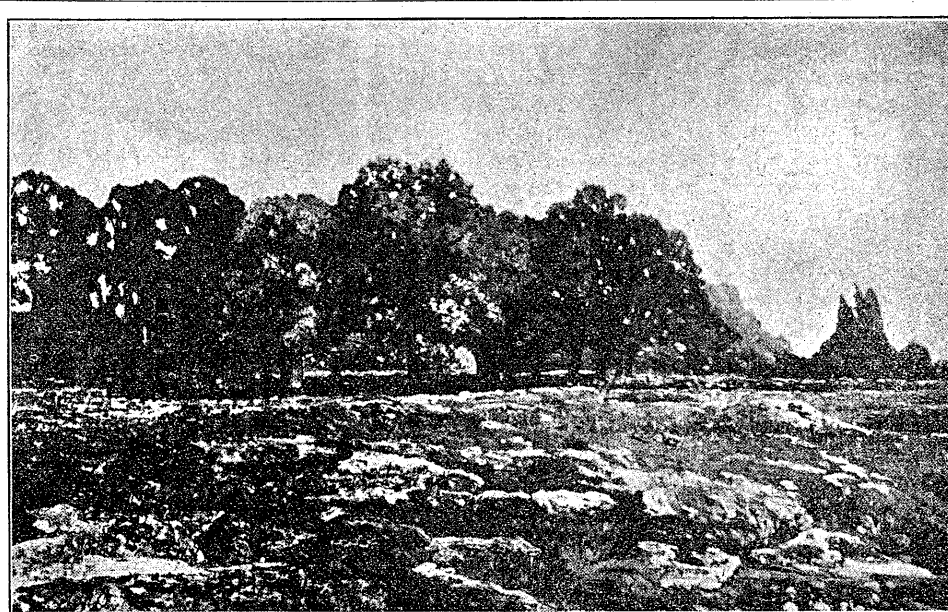
象派の觀念によりて偉大なる勢力範圍に包みこまれ、事實上コンステイブル、ターナー、ポントンを稱せざる可らざるを感じぬ。當時の英國藝術家は皆て是等の人々の成せる作品の意味を解するものなく、彼等の貴き發見によりて何等の贏ち得る所も無かりしが如し。彼等製作家は實に其時代に超えたるものあり、其觀念は進んで修養熟成の爲外に出づるに至れり。

第一、描畫の方法繪畫の作成は全たく戶外によれり。コンステイブル、ターナー及びその他同時代の多くの作家は往々亦之を爲しき。第二、或る科學的主義によりて、斑點線條若しくは濕潤の物はた多少純正なる彩色をカンヴァスの上に配列すること第一に次で來れり。ターナー及び殊にワッツは、此有力なる製作法を實行したり。次に明暗共に等しく繪畫面上を通じて、濃厚なる純白の色を用ゐること、コンステイブル及びターナーは佛國の此主義が英國に入るに先ち、既に久しき以前之を試みしなり、例へばコンステイブルの作にかゝる大なる「ウオートルロー橋門」の如き即ち其最も明なる證左たり。そのカンヴァスの殆んど全面殊にその前景は純白の繪具を以て塗抹せられ、其下部の濃厚なる彩色を蔽ひて、能く幻影を感受せしめ、燦々たる明光の震動的效果は簡單に且十分の成功を示せり。歴史は之に付きて當時の批評を記したり、或は風雪の如しといひ、或は伯林の織物に類似せりとて、悪言戯評に附じ去られたりと。然も今日にはローヤルアカデミーに於て名譽ある地位に置かれ、凡ての觀識者の正當なる判断に任せらるゝことゝなれり。現時の公嗜味は、假令全く印象派の作を非常に贊嘆せざるも、少くとも能く之を認許する迄には至れり。

當時はコンステイブル實に他の作家の如く、倫敦に於てよりは巴里に於て非常なる稱賛を博し、サロンはアカデミーに於て拒絶されたる作に對して満腔の歡迎を表したり。

同アカデミー冬季展覽會に出品されたるポニントン「ブルー」の魚市場は偉大なる勢力を有したり、殊にマチーに於て然りとす。其白色の調和平衡の價値は實に佛人の様式に於ける極めて著しき形状なりとす。近代の印象派は光を崇拜し、或る麗はしき大氣の力を記す程幸福ならざるものあり。こはターナーに於て大に見る可し。然して佛人は吾々を欽仰し及び彼等の今保持せる名譽ある優秀の地位に付いて何等の判断をなせる

か、とは必然に生じ來る可き疑問なりとす。之に對しては、第一彼等佛國人には英國人の發見したるものゝ價値を認めたること、其實行を復活したること、之を論理的結論に置きしこと等の大功蹟あり、然して其間亦コンステイブル及び他の作家に接ぐに、日本の美術及び佛國人たるローヤルより得たる感受を以てしたるの點に於て大に稱す可しとなすなり。佛國人はパレットの上を純潔にし之を簡略にしたる、即ち概して黒色褐色赭色及び暗温の色を排斥佛國シスリー氏筆 フォンテンブローの森



すると共に、あらゆる種類の溼青及び乾燥質のものを用ゐること亦之を廢し之に代ふるに近代化學上の探見よりして得たる新しき光澤ある彩色を用ふることゝなしたり、例へばコバルトの莖色、青白カドミウム、薔薇色等の如き是なり、是等は高度の光輝を得るに於て從來のものよりは遙に好適なるものとす。亦佛國人は文字の要素を捨て、之に代ふるに日本よりして得たる簡單なる線條を採用し、之れによつて透視的に非常の成功を得、色彩及び蔭影に於ける反映の研究を進むるに至り